

「ういろう」考

式 正英

「ういろう」と聞いて東京在住の者が思い出せるのは、名古屋名物のお菓子のういろうである。幼い頃最も形の似ている棹物の羊羹を勝手に連想して、それ程には甘くないのがっかりしたりした思い出がある。それが大人になってから口にすると、ういろうは抑えられた甘みであっさりしているし、歯に粘る度合も程々で身体にも害にならない感じで、折々重宝している結構な食品である¹⁾。中京方面に旅行すると土産に良く買って帰るのがこのういろうと守口漬である。

数年前の秋、秋吉台を歩いた後山口市の湯田温泉に宿泊した。翌朝帰京する土産を需めて菓子屋に立ち寄った所置いてあるのが名産の「ういろう」であった。ういろうは山口市の名物でもあった。ついでながら県庁所在地の都市に温泉があるのは街にゆとりを与える趣で悪いものではない。甲府市の湯村、松山市の道後、鳥取市等その例は存外多い。ういろうについては他にも京都で作られていると言う。そうなると名古屋名産と言うだけでなく、由来や名称等も気掛かりになる。

名古屋では大須ういろうが著名であり、大須まで行って確かめた事がある。名古屋市街の中心から少し南に位置する、東京で言えば浅草に似た繁華街で観音様がある所まで共通している。勿論この場合は大須観音であり、その門前町の商店街の中の目立った老舗として大須ういろうの店があった。ところで濃尾平野の真中、羽島市の南部、名鉄竹鼻線の終点に大須駅がある。付近は長良川の左岸で羽島市桑原町大須であり、ここにあった大須観音堂が名古屋に移された経緯がある²⁾。12世紀末に建立された後、寺運が大いに栄えたが兵火や洪水に遭い、慶長17(1612)年、家康の命によって移転したのである。現在も羽島

の大須に宝生院真福寺として名残が留められているが、名古屋市の大須観音も当然宝生院である。ここでの門前町の興隆も慶長期以降と考えられるから、大須ういろうの定着は早くて17世紀ということになる。

小田原市の国道1号線に沿う街の中心付近³⁾昔欄干橋町、現在の本町一丁目に城の天守閣を移して来た様な、極めて目立った建物の堂々とした店舗があるが、これが「ういろう本舗」なのである。正面の扉から店内に入ると先ず目につくのは、上述して来たものと同じくお菓子のういろうである。ここにもあったと言うよりは、ここの本舗の由来からういろうの元祖を小田原としてもよい位である。店の奥まった左隅は菓の売り場であり薬局としても機能していると見えた。ケースの中に菓のういろう「透頂香(とうちんこう)」が置かれているのを見て、注文した所、びっくりした事に売ってくれないと言う。原料不足の為生産が及ばず、以前からの常用者には止むを得ず販売するが、漫然と購入しようとする者には売らないと言う。その「売らないお願い」の弁も印刷されていて用意周到である。今の世にこの流儀が罷り通る事は異様な感じがするが、近世や中世に時代を戻せば漸く納得できる。

小田原にういろうが定着するのは永正元(1504)年である。外郎(ういろう)家五代目宇野定治は北条早雲が小田原を整備するに伴い、早雲に請われて京都から移った。外郎家の祖先は中国の出身で陳氏、元朝に仕える大医院並びに礼部員外郎と称する役人であったが、元が滅亡した時、1368年陳延祐は日本に亡命帰化し博多に住み陳外郎と称した。その子が京都に移って朝廷の典医を勤め透頂香を製造し、投薬の際の口直しや客の接待とし

てお菓子も作った。家運は栄え定治の代から宇野姓を名乗り、京都の弟に典医の職と菓子の製法を残して小田原に来住したが、京都の外郎家は足利幕府滅亡と共に兵火にかかり滅んだ。

小田原の外郎家は北条氏から与えられた宅地に1523年に八棟造りの目立った建物を建て、東海道を通行する者の耳目をひいた。江戸時代の錦絵や歌舞伎の舞台背景にこの建物が登場する程に際立った存在であった。この建物は寛永、元禄、天明の地震で損壊したがその都度再建され町家風に変化したが、関東地震で倒壊した後現在は鉄筋コンクリートで後北条期の状態に再建されている。

お菓子のういろはは京都の外郎家に仕えていた職人によって、地方に伝えられ商品化されたが、これも江戸期以降であり名古屋や山口の物がこの系統と思われる⁴⁾。小田原の外郎家ではお菓子のういろはは家の中で用い商品にはせず、いたが明治以降販売する様になった。菓のういろは即ち透頂香が外郎家の主力商品であり、祖先から医術薬方に優れ、漢方処方による家伝の霊薬である。万能薬として又救急薬としても効果があり悪臭をも消すと言われている。昔公卿達が冠にこの霊薬を挟んで必要な時に取り出して服用したから、頭部を透して香るので名付けられたと言う。菓のういろはその効能によって珍重され、北条氏が小田原落城によって亡びた後も、大久保氏や稲葉氏等歴代城主の保護を受けたお蔭で、透頂香の名声は定着したものとなった。

享保期に歌舞伎の二代目市川団十郎は菓のういろのお蔭で、痰と咳の持病が治り、その事を徳として歌舞伎十八番「外郎」が上演されるようになったと言われている。団十郎自らういろ売りとなって述べる台詞は、今も俳優の台詞の稽古で使われている程の見事さと言う。但しういろの行商は実際には行われておらず、舞台の上の創作なのである。江戸期には薬品としてのういろの評判と権威がいやが上にもあがった証拠でもある⁵⁾。

ういろは製菓としては日本最古で是までに述べて来た様に室町時代に起源を遡る。ういろ本舗は小田原にしか本来の店はないと本舗で頂いた資料⁶⁾に書かれている。外郎家の製品は一子相伝で分店等一切ないともある。然し児玉幸多の著書の松井田宿の記載に次のくだりがある。「松井田宿も数年前までは旧態を残していたが、道路の拡幅などで様子が変わった。・・・小田原の外郎の分家であった陳道齋の店もない。この道齋の家は戦国末期には松井田に入っていたといい、小田原と同じように、透頂香を売っていた。陳氏の墓は宿入口左手の崇徳寺にある。・・・」とあって、松井田にも古くから出店していた事になる⁶⁾。

松井田も小田原と同様の地理的位置であり、街道に沿う主要な宿場である点は真に興味深いものがある。松井田は中仙道に沿い妙義山の東麓に位置し関東平野への入口である。商業上の経営戦略拠点として両方の町を考えるのは極めて理論的と思われる。分家を置かないで来た方針や松井田ういろが陳氏に戻っている等矛盾を感じるが立地戦略の見事さから、外郎家の政策と考えて差し支えなからう。長い時間の経過の内には原則そのものが揺らぐ事があり得ると考えておきたい。又後北条氏の勢力が群馬県の辺まで及んでいたのだから、小田原から松井田にういろが進出する事も比較的容易だったのではあるまいか。

小田原から東16キロメートル程にある大磯も東海道の宿場として鎌倉期以来栄えて来たが、ここに今も続いている俳諧道場の鳴立庵の存在もいささか著名である。砂丘の蔭と流れ込む小沢を西行の歌の鳴立沢に比定した立地の巧みさは舌を巻く程のものがある。元禄8(1694)年に大淀三千風と言う俳人が庵を開き西行の像を置いて意義付けを確かなものにしたとされるが、建物を定めたのはそれより30年前、寛文4(1664)年であり、小田原の崇雪の別荘であったと言う。崇雪は五智如来像を庭に置き鳴立沢の標石を建てたとさ

れるから、西行をこの地に定着させた始まりはやはり崇雪と考えてよい。しかも標石の裏面に「あきらかに湘南は清絶をつくすの地」と刻んであり、これが現在の湘南の呼び名の由来を示すものだと考えられている。崇雪は実は小田原の外郎家の子孫であるとする説もあるが定かではない⁷⁾。ただ立地の確実さや湘南はもともと中国湖南省洞庭湖の南岸一帯の地域名である点に思いを致すとき、崇雪と言う人物が只の俳人とは思えなく、外郎家と関係があっても不思議ではない様に思えるのである。

参考資料および注

- 1) お菓子のういろはは米粉、餅粉、砂糖等で作られる。元禄期以前は白砂糖ではなくあめ、みつ、黒砂糖が使用された。
- 2) 宝生院真福寺：美濃国大須観音略縁起（羽島市重要文化財）。
- 3) 中村静夫（1974）：城下町宿場町小田原（19世紀中頃）3000分の1。
- 4) お菓子のういろは、本舗以外の地方で製造されたものの名称は「ういろ」「外良」等となっており、「ういろ」とはしていない。現在も小田原の製造本舗の株式会社ういろが「ういろ」を登録商標にしている。
- 5) 外郎藤右衛門康祐：ういろ、外郎家及びういろの概歴；小田原銘菓 ういろ；八棟造り再建に就いて 等の資料。
- 6) 児玉幸多（1988）：松井多宿 『中山道を歩く』（中公文庫）427 p.
- 7) 草間時彦ら（1995）：鳴立庵開庵三百年 大磯俳句読本 151 p. 大磯町発行。